
第一章 水の力、太古からの流れ

中野区やよいちろう弥生町

最初に向かったのは中野区本町ほんちようから弥生町周辺。駅名でいえば丸ノ内線中野坂上駅と、さらに地下鉄で二駅離れた中野富士見町駅周辺。

個人的な体験と深く関係しているのだが、このあたりは私が東京に暮らし始めて最初の東京体験の地だ。三十数年前に写真を勉強するために長野から上京したのだが、その写真学校（東京工芸大学）がここにある。

写真学校は住宅街の真ん中であって、学校の目の前、歩いて四〇メートルほどのところにコンクリートに両側を囲まれた川がある。コンクリートの壁は垂直で、ずいぶんと傷んでいた。それまで、こんな形状の川など見たことがなかったもので、田舎者の私は川だと認識できず、巨大な排水溝だと解釈した。つまり、最初から完全に人工的につくられたものだ。

だから、神田川だと知ったときはとても驚いた。神田川かみがわの存在はかろうじて知っていた。か



地下鉄丸ノ内線（方南町支線）中野富士見町駅（右上）～方南町駅とその
周辺。左を南北に貫くのが環七通り、中央が東京メトロの車庫。
1:25,000デジタル標高地形図「東京都区部」（一財）日本地図センター 平成
18年（2006）発行

ぐや姫が歌う「神田川」という歌によって。その歌が流行したのは昭和四八（一九七三）年で、私は五歳だから、もちろん同時代ではない。ときどきテレビで流れていたから歌詞くらいは知っていた。ただ、目の前の川と歌詞の「横丁の風呂屋」がどうしても結びつかなかった（実際には「神田川」の歌詞は、もっと下流の高田馬場あたりがモデルといわれている）。

当時の神田川はよく氾濫した。憶^{おぼ}えているのは、ある日学校に行くと数人のクラスメイトが欠席していたことだ。みな学校近くのアパートに下宿していた。台風が東京を襲った翌日のことで、先生は、「神田川が氾濫して、あいつら、学校に来られないんだよ」と言った。冗談かと思っただけれど本当だと知った。

はじめて見た「東京の野性」

私は授業のあいまに川の近くまで行ってみた。普段は高さ一メートルほどのコンクリートの壁が歩道沿いに見えているのだが、それが水で隠れていた。驚いたことに壁の上を水が乗り越えていたのだ。濁った水は灰色だった。向こう岸は遠く、人が渡るとしたらかなり危険だ。普段は底を弱々しく水が流れているだけの排水溝というイメージは消え、荒々しかった。

このとき、私ははじめて東京で野性を見たのだと思う。あるいは太古から変わらぬ水の意味

を最初に目撃した瞬間だった。ただ、対岸の学生が絶対に学校に来られないということは冷静に考えればあり得ず、上流とか、下流など、あるいは渋谷までバスで出て、山手線と地下鉄を使つてぐるりと回つてくるなど、方法はいくらでもあつたはずだが、その努力をしないのが学生らしいということだろうか。

最寄りの中野坂上駅から写真学校へ向かうには山手通りから行くとわかりやすいのだが、近道があつて、住宅街の路地をジグザグに進む。すると最後は学校の裏に出るのだが、そこで急に視界が開ける。渋谷方向が一望できるのだ。そこに立つたびに、東京にもこんな見晴らしのいいところがあるのだといつも思った。そこから先はコンクリートの急な坂になる。半分階段、半分坂道という奇妙な細い歩道だ。階段なのは明らかに勾配が急すぎるからだろう。

なぜ、そこが高台で、急な坂なのか。当時、深く考えることはなかつたが、あるとき訳を知つた。神田川の水が台地を削つたからだ。気の遠くなるような時間をかけて、足元から先の膨大な量の土が水によつて流された。その先端に自分が立っていることを知つた。急に東京の街が違つて見えだした瞬間でもあつた。





コンクリートが水の流れに見える

その後、東京の西から東に流れる河川の場合、北向き（南側）の斜面より南向き（北側）の斜面の方が、傾斜が急なことが多いと知った。立体地図を注意深く目にする、一目瞭然だ。

そのことについて貝塚爽平は、『東京の自然史』のなかでこう書いている。東京は火山灰（赤土）が特徴で、

「南むきの日なた斜面では、土が乾いてしまつて、霜柱ができないが、北むきの日陰斜面では、土が乾かず水分の量が多いから、霜柱がたち、日中になつて気温が上がるとそれがとけてくずれ、それに伴つて土がずり落ちてゆく。次の夜がくるとまた霜柱が立つという具合で、冬の間このようなことがくり返されるのである。日陰斜面では、斜面がゆるくなつており、反対に日なた斜面は急だという所をみかけるのはこのためである」

というのだ。この説が正しいのかどうかはわからない。でも、神田川、目黒川などはかなりこの傾向がある。そして私が立っている学校裏の高台もまさに南向きの斜面に位置し、対岸にくらべて傾斜はくらべものにならないほどに急だ。

私はまずこの高台の上に三脚を立てて写真を撮った。最初の一枚はここからと決めていたの



だ。言ってみれば、ここからの眺めが私の東京始点となる。

次に坂を下り振り向くかたちで、坂の上に向けて木製の蛇腹式のシノゴのカメラを構えた。写真の特性で、坂はなかなか描写されにくいのだが、シノゴカメラのピントグラスに左右上下逆に映る像を見ると、ふとコンクリートそのものが、水の流れのように見えだす。私は約二万年前の氷河期の最盛期に、世界的な規模で起こった海面低下を想像してみる。一〇〇メートルから一四〇メートルの海面低下があったと考えられている。現在の東京湾も大半が地表だったことになり、そこに古東京川という川が流れていたようだ。海面がずっと低かったということは流れはより急だったはずだ。私が立っている場所も、その時にどれほど侵食されたのか。想像は別の想像を生む。連想は止まらない。

水の意味を私は確かに感じる。目の前の眺めがまるで違って感じられる。

岬のような河川の合流地点

次に神田川と善福寺川が合流する地点に向かった。ここもまたずっと以前から気になっていた場所だ。東京の西の地図を注意深く目にしていて、かならず気になる地点で、立体地図だとより際立つ。神田川と善福寺川はともに西から東へ流れていて、神田川が南、善福寺川が北



側だ。そのふたつの流れは東に行くほどに近づき、流れのあいだの台地の幅も次第にV字形に狭まっていく。

合流する地点はあたかも岬のように尖^{とが}っている。東京の西側で、こんなふうな鋭角に河川が合流する地点はそう多くなく、際立っている。

興味深いことに、この合流地点には古くから人が住んでいたようだ。向田遺跡^{むかいだ}という、縄文後期、弥生時代の遺跡がある。台地の上に集落があり、^{たてあなしき}竪穴式住居があつたとみられる（「東京都中野区向田遺跡発掘調査報告書」中野区教育委員会、一九八〇年）。

和田廣橋という古い橋のすぐたもとがその合流地点で、傍^{そば}に杉並区がつくつた案内板があつた。そこには「善福寺川源流（^{せののい}遅野井の滝）から11・3 km地点」と書かれていた。ここで善福寺川は神田川に飲み込まれ、名を消す。つまり神田川の支流ということになる。ただ、実際の流れを注意深く見てみれば、明らかに神田川より善福寺川の方が水量は多い。コンクリートでつくられた川幅も善福寺川の方が同じく大きい。

このあたりの標高差は肉眼ではほとんど認識できない。地図上では緩やかに西の方向に向かつて上り坂になっているはずだが、緩やかすぎる。合流地点の南西の方向に巨大なマンションがあつて、そのあたりは明らかに一〇メートルほど高いはずだが、まったく判断がつかない。

カメラから覗くと、よりわからなくなる。では仮に地表が覆い尽くされていなかったら、わかるのか。おそろくわかるだろう。それが道路と建物で覆い尽くされているから、判断がつかないはずだ。

これから始めようとしている撮影がかなり困難な、つまり写真に写りにくい旅になるだろうと予感した。だから、地表を膜のように覆っているコンクリートとアスファルトのすぐ下のかたちを想像することが、重要になるだろう（その後、同じような状況には何度も出くわすことになるのだが）。

ちなみに、合流地点の対岸は東京メトロの巨大な車庫だ。地図で見ると、そのあたりは合流地点より標高は少し高く平らだ。おそろく、神田川（あるいは善福寺川）によって削られ平らになった痕跡だろう。

一万年前と変わらないもの

私は岬の先端に立ち、川下を望む。思いがけず感慨をおぼえた。コンクリートの壁とフェンスが合流地点に向かって忠実に鋭角に尖っていて、自分が川の先端に立っていると感じさせてくれたからだ。美しい。





川底のコンクリートのあいだから生えた雑草のライン、古いマンション、新しいマンション、アパート、鬱蒼とした木々、電柱、電線……。一見、東京らしいさまざまな要素が混じり合つた、どこにでもありそうな風景だ。でも、私には違つて見える。思いを縄文、弥生へと馳せているからだ。例えば縄文の一人の男を想像する。私が縄文時代の風景を目にすることがかなわないように、縄文の男は、たった今私が見ている風景を見ることはできない。でも、もしも見ることができたとしたら、彼は何を思うのだろうか。何を感じるのだろうか。想像する。同じ場所を、同じ場所だと認識できるのだろうか。

それでも、ふたつの水の流れはきつと変わらない。縄文時代も似たような速度をもつて流れていたはずだ。水の意味はどれほど時間を経ようが、途切れず変わることはない。あたり前すぎるそのことに、新たな発見のように気づいた。

〈解説〉宅地化に追いつかなかった河川改修

今尾 恵介

地下鉄丸ノ内線に乗っていると、たまに「中野富士見町行き」の電車が来る。しかしこの駅は池袋から荻窪までの本線上にはなく、新宿から西へふたつ進んだ中野坂上駅で分岐する「方南町支線」にある車庫へ入るための列車なのだが、その敷地の立地がおもしろい。昭和三一（二九五六）年修正の地形図では広大な田んぼであった。場所は神田川と善福寺川が合流する地点の南側で、それだけに古くから頻繁に洪水に見舞われていた地域である。

小林紀晴さんが学生時代、神田川の氾濫のために級友が欠席したというエピソードは、人口急増の圧力で急速に進む宅地化のスピードに、河川改修がとも追いつかなかったことを実感させてくれる。この地形図によれば、ここから神田川を少し上流側へ遡ればまだ田んぼの中を蛇行しており、垂直の壁を築いて自然河川を「カミソリ擁壁化」で排水溝に変身させる工事がちょうどこの頃にどんどん進められていた証拠だ。

さて、駅名になった富士見町は今はなき地名であるが、文字通り「富士山を遠望する高台」にちなむもので、このエリアが東京市に編入される前年の昭和六（一九三一）年に雑色ぞうしきの一部を改称して誕生した比較的新しい地名だ。編入直前の住所は「豊多摩郡中野町富士見町」であ

った。ここの高台には現在の歌舞伎町にあった東京府立第五高等女学校が移転して来たが、戦後に新制高校として発足し、昭和二五（一九五〇）年に富士見町の地名から都立富士高等学校と命名されている。ところがその町名も昭和四二（一九六七）年の住居表示で弥生町という新町名に統廃合され、すでに半世紀が経った。

この一帯は標高三八メートル程度の武蔵野面の台地を神田川と善福寺川が侵食したところで、その谷に土砂が堆積して標高三〇メートルほどの沖積面を形成している。侵食を受けた崖はかなりの標高差で、車庫のすぐ脇を流れる神田川の西の崖上には早くに集合住宅ができ、現在はこれが高層化されてさらに「聳え感」を増している。